

京鹿子



（昭和二十三年六月一日第三種郵便物認可）
平成十七年一月一日 創刊
通巻九九号（毎月一回） 一回発行

2月号

— 近 詠 —

湖北虹 丸山佳子

無にまさるこの映え冬に湖北虹

黒白鳥城四百年の不和しらぬ

寒梅は心の薬味城下町

あきらめのよき樹相かなこの落葉





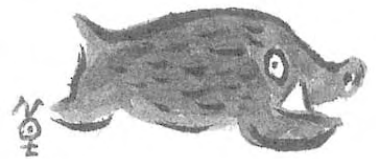
付きまどふ北風小僧に一封を
尾花みち対向車にも手を振られ
はからずも百倍日なり寒太鼓
峠では切れ味よかつた枯すすき
達筆に「山砂あります」枯木村
長女のみ使へる言葉お歳暮に

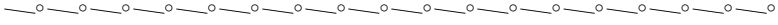


豊田都峰

清響集 その七十

枯れてなほ風の放さぬ山吹は
枯山吹風のひびきを遠耳に
粕汁や峡のひと夜はともがきと
日当たれば枯木四五本のそれつきり
ひとしほに灯をひくくせば北風ごころ
枯芭蕉辻の祠を守るつもり





枯芭蕉おほひつくしてなにかある

もどりくるは母のことなり炭あかり

枯木立高々と月の切抜き

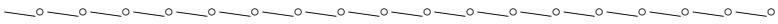
冬湖晴れ周嶺藍を塗り重ね

詠ふゆゑ一樹は丘の初景色

賀状

初比叡都峰と名乗り六十年

「現代俳句」二月号十句掲載



秀華採集

魯田のひとつひとつに影のあり

木山杏理

魯田という命のあり方、いわば、後生えである。穂さえつける、しかし実らない。そんな命の影、一つの存在として認めるように謳うところに、作者の考え方を知らる。思い入れの心である。

西域へ入り日のとどく芒原

武藤ともお

絮芒むかしがたりはまだできる

森 茉 明

晩年や夢の中にも月の光げ

同じ

武藤作品、西へのはるけさがよい。森作品、ともに晩年のこころのあり方を謳うことに賛同したい。晩年という語を恨みたい。

鈴鹿 仁

猪の牙

賀状くるその健かき猪の牙
風の戸に久しき呼び名嫁が君
初詣磴嶮しくも阿吽の氣
裸木のつぶやき空を碧くする
風凍てて放浪ぐせの枝の鳥
饒舌のをとこ嫌はれ寒雀
寒雀嫗の口を塞ぎ翔つ

近 詠

宇都宮滴水

冬 耕

冬耕の独りとなりて影を曳く
寒鯉の音の向かうにある怠け
大年や五右衛門風呂の板を踏む
女正月曇りガラスに手を汚す
膨ら雀点景として棟を占む
お年玉二千円札は残しをく
盆梅の丈に目を置き目を余す

神麓集



三世つぐ千宗旦茶立虫
かまど馬佗茶をこえて極佗と
舟底のやうな天井草雲雀
襖絵や探幽筆の寒雲亭
寒灯を賞でし宗旦欠灯籠

林 日圓

菊まつり 北村 香朗

天平を謂ふ下野菊まつり
下野の国分寺跡返り花
見沼田圃いまコスモスの群落到
奥多摩の蕎麦に舞茸踊るかに
秋の陽を満身に浴ぶ露天風呂

秋思文字 丸山 冬鳳

小筆ペン解つたやうで秋思文字
コーヒーを好みの二杯目虫冴ゆる
孫の脊のづんと脊廣く里の秋
里の夜の灯影さまざま虫百科
谷の瀬の落葉一枚紅流す

冬 構 藤岡 紫水
陽も音もともに散らして柿落葉
一椀の蕎麥を供養に一茶の忌
山茶花の白きに暮色定まらず
冬旱山は乾きの音ばかり
妙心寺ゆゆしき冬を構へけり

角 直指

秋ざくら叫喚地獄ありし地に
秋ざくら五足の靴の入りし坑
コスモスに素直な風の道がある
古墳守深くおろせる秋すだれ
冬近し刻は未来へきざまるる

吉田 多美

十三夜影絵の狐コンと啼く
照紅葉何時も遭ふ女今日は見ず
志あれども老いて風は秋
蛇穴に夢のつゞきは土のなか
むら雲の月をかくして夫の病む

神麓集



高台寺 丹生をだまき
あるか無きかに佇つをみなへし高台寺
ねね様の噂に苑の秋深む
秋陰や蒔絵の金も静もりて
築山の楓の風格色に出づ
魚はねて広がる水輪秋気澄む

山田をがたま
病癒え再び夫と秋の旅
伊勢路はや糶田となり機嫌よし
見なれたる英虞湾秋の色に満つ
秋灯快癒に海老のフルコーラス
癒えし身をいとひ夜長の湯泉に浸る

神楽月 丸井 巴水
秋の霜地に働きの影もなし
絡繰の巫女は黒帯浦祭り
石段は天へ続けり神楽月
秋の昼告ぐ聴鐘の音は錆びず
黄落の並木珊瑚の夜を迎へ

スプリングエイト 川崎 光一郎
スプリングエイトの囲む山粧ふ
秋澄むやつるつる英文案内書
放射光実験棟の紅葉映ゆ
電子銃・シンクロナトロン秋の空
ゆく秋や見えぬ無音の放射光

絡繰 森津 三郎
曳山の一つ異人が湖の秋
秋光に投げし粽を受ける児等
曳山の笛にはやされ銀杏落つ
絡繰りの魚籠外れても山を曳く
笛太鼓鐘絡繰りの秋祭

高橋 千美
古戦場石仏五百の秋の声
洗はれて落葉掃かれてけふの句碑
翔つ鷺のしづく点々水の秋
民宿の隣り民宿浦小春
松の木に脚立の残る日短か



京鹿子集

豊田都峰選

黄葉しぐれ今推敲のどまん中

東京 木山 杏理

絮芒むかしがたりはまだできる

枚方 森 茉莉

魯田のひとつひとつに影のあり

コスモスの野にシヤガールの雲ひとひら

生ハムに塩味きいて冬に入る

曇天の紅葉まみれに母を置き

折りかけの紙の鶴翔つ十三夜

晩年や夢の中にも月の光げ
うしろかげゆれてこすもすうすむらさき

お使ひのとなり村まで曼珠沙華

京都 武藤ともお

運動会莫座の上なる三世代

さま 神田 惣介

鳶の輪のむすびてはとく秋彼岸

西域へ入り日のとどく芒原

寝付かれず戦史取り出し虫の声

からす瓜なかに打出の小槌の実

奏樂堂の裏の小径の虫合奏

すみずみへ秋風とどく永平寺

名月や京都離れて半世紀